

## 第七章 ハワイのマカヒキ祭とクツクの死

森 貴史

### 一 クツク殺害という事件

ハワイでクツクが殺される ハワイ諸島東南端に位置する、この諸島最大のハワイ島西側のケアラケケア湾岸で、ジェームズ・クツクが住民たちに殺害されたのは、一七七九年二月一日のことである。

このとき、キャプテン・クツクという通称でも呼ばれるイギリス海軍の艦隊指揮官は、第三次世界航海の途上にあった。これまでの二度の世界航海によって、世界航海者クツクの名声はすでに当時、ヨーロッパにあまねく知られていた。高精度の経度測定を可能とする天体観測のデータを求めて、南太平洋の楽園といわれたタヒチ島まで巡航したり、西欧にとつてそれまではほとんど未知の領域であった南半球、なかでも太平洋南海を踏査したりした功績によって、現在の世界地図の原型を完成させた人物といえるだろう。

一八世紀の啓蒙主義者たちは、クツクのこうした功績を高く評価した。たとえば、かれの第二次世界航海に参加し、その航海記をあらわして、一躍著名になったゲオルク・フォルスター（一七五四―一九四）は、クツクの地理学



図7-1 ジョン・ウェバー《クック船長の死》(Smith, *Imaging the Pacific*.)

と航海術への大いなる貢献のみならず、たくさんの発見をなしえた航海を三度も可能にしたクックの資質をほめそやしている。「ものごとのバランスを迅速かつ明確に理解し感じ取る想像力。正しく認識してゆるぎなく決定する判断力。『……』理性にコントロールされて、公正と善良と人間性へと向かうほうがずっと多い魅力的な感情」をもっていたクックは、「発見した島があればほど広範囲におよぶにもかかわらず、『……』このうえなく多種多様な民族とたいてい良好な関係を築いていたのであって、暴力的な防衛に踏みこむという暗然たる切迫した状況におかれるのはきわめて稀有な事例にすぎなかった」。すなわち、クックの多岐にわたる才能としては、南太平洋諸島の住民たちに対する文化人類学的視点からの観察能力や、かれらとの外交能力にも定評があったということである。

しかし、そんなクックがハワイの住民たちとの紛争のさなかで殺害されたのだ。

この事件は、サンドウィッチ諸島、これは海軍本部委員会主席のサンドウィッチ卿にちなんで、クックがハワイ諸

島にあたえた名であったが、一八世紀後半のヨーロッパ人の記憶に、その島民たちのはかりしれない〈未開性〉という印象を決定的に刻印した。ジョン・ウエバー（一七五―一九三）による《クック船長の死》は、この〈未開性〉をうまく表現している。

ウエバーは、クックの第三次世界航海に同行していた画家で、この航海にまつわる風景画を多く残した。だが、かれ自身はクック殺害の現場にいたわけではなく、そこに居合わせた人びとの証言をもとに描いたものがこの絵であるという。短剣をもった住民が（卑怯にも）クックの背後からしのびよる場面を描いた、この絵はそれ以降、クック殺害という事件を描いた一連の図版がハワイの住民たちの〈未開性〉という「主題」を継承していく原点となっている。

現代では、このハワイの住民たちの〈未開性〉とされてきたものをそのまま受容することはない。クック殺害は、ハワイ住民の〈未開性〉に起因するのではなく、もつとべつの宗教的要因によるものとされる。たとえば、文化人類学者マーシャル・サーリンズの考察では、ポリネシア地域に広くおこなわれている宗教儀式マカヒキの祭りに対するクックたちの理解不足と、住民とイギリス人双方のコミュニケーション不全、ならびにこの宗教行事の進行過程がクック来航および滞在期間と偶然に重なった結果が、ハワイでのクック殺害の原因であると分析している。しかも、この宗教儀式は人身供犠をとまなう儀礼であって、これにクックがはからずも深く関与してしまったために殺害されたとみなすのである。

本章は、このマカヒキの祭りをメインにとりあつかうものであるが、この宗教儀礼を考えるうえで忘れてはならないのが、ハワイ諸島の位置である。これは地理的な位置のみならず、文化圏の位置でもある。ハワイ諸島が属するポリネシアとは通常、ハワイのほか、ニュージーランド、イースター島とともに構成される三角形をなす南太平

洋東部の広大な地域をいう。この地域の大小数千の島のなかには、サモア諸島、トンガ諸島、タヒチ島を含むソサエティ諸島も属している。クックの世界航海記をひもとくと、クックがその航海でこれらの島々を「発見」している過程が描かれているのがわかるだろう。約三〇〇〇年まえ、東南アジアの海岸からカヌーで、メラネシアやミクロネシアを経由して、西ポリネシアの島へと到達し、そこを起点に、さらに現在のポリネシア地域に拡散していったのが、いわゆるポリネシア人たちの先祖とされる。

それゆえ、このポリネシア地域の島々での文化や宗教が、それぞれの島の固有のものか、あるいは地域共通のものかを、人類学者たちは分析してきた。そうした試みはすでに、クックとともにポリネシアを来訪した学者たちがおこなっていた。かれらは、ひとつの対象に対して、島ごとにそれぞれ異なることばで言い表していたのを一覧表にして、辞書を編纂しようとしていた。これは、いまもまだ実態が解明されていない当時のマカヒキ祭の輪郭を描いていく作業にもあてはまる。すなわち、ハワイのマカヒキ祭を再構成するさいに、その断片として、ハワイ諸島以外の島での観察記録や記述が参考資料となるということだ。

クックのハワイ島滞在を、ビーグルホルルの伝記およびサーリンズの分析に依拠しながら、このハワイの宗教行事マカヒキの祭りとともに叙述していく一方で、本章はこれと関連して、ヨーロッパからの来訪者クックがハワイ諸島の社会にどのような文化的かつ宗教的影響をあたえたかを考察するものである。

## 二 ケアラケケア湾での儀式

イニシエーション

豊穰祈願の祭り マカヒキとはそもそも、ハワイのことばで、一〇月または十一月から始まる四ヶ月間の季節のこ



## 二 ケアラケクア湾での儀式

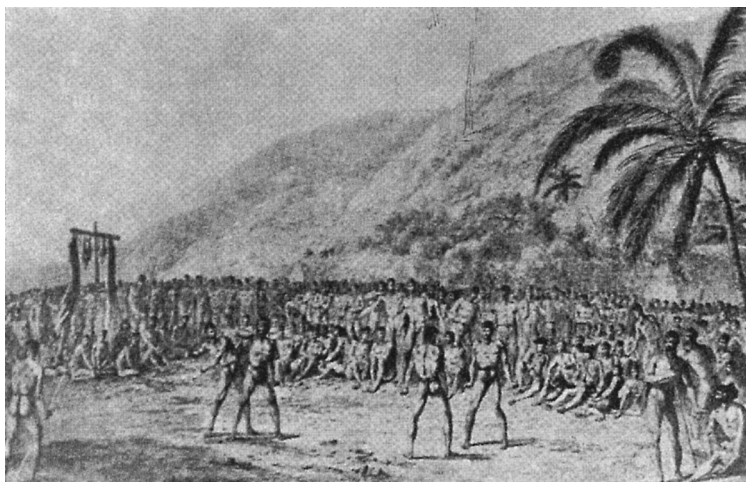


図7-2 左端にある十字架状のものの左右に布がかけられているのがロノの神像で、画面前方では格闘技がおこなわれている（後藤明『カメハメハ大王』）

とをいう。ハワイはおもにふたつの季節にわかれており、マカヒキは雨季の続く冬に相当する。この期間は、戦いはむろんのこと、重労働も休止され、そのほかの季節よりも、スポーツらしきレクリエーションがおこなわれる。くわえて、農業収穫の季節であるゆえに、収穫からの税を集める季節でもあった。そして、この季節の神の名はロノ、「ロノ・マクア」（父なるロノ）と呼ばれていた。この税の徴収は、ロノの神像がゆっくりとした時計回り（右回り）で島をめぐっていくことでおこなわれる。

サーリンズも依拠しているところの、クックの伝記作家ビーグルホールによれば、この神像は「長い棒に短い横木をつけ、それにタブーとされる旗を垂らしたもので」、「船の四角な帆に非常に似た形」にみえた。タブーについては後述するが、この横木に垂れ下がっている「旗」とされるものは、白い樹皮布とカウプ鳥の皮であって、マカヒキの季節が始まる一〇月や十一月に産卵と子育てにやってくるアホウドリ、詳しくは白いコアホウドリ (Laysan albatross) の皮であるという。

そうしたロノ神の儀礼や形象からは、季節の変わり目に農耕の豊穰を祈願する農耕儀礼で祀られる農耕神としての特徴がみられる。税としておさめられる農作物は、豊作成就のお礼としてのおそなえとも解釈できるだろう。

ここでクツクの滞在に話を戻そう。たび重なる船の不調ゆえに、操船がうまくいかなかったクツクたちは、一七七九年一月一七日、ハワイ島のケアラケクア湾によく上陸する（そのふた月まえの一月二五日から同じくハワイ諸島のマウイ島沖で住民たちとの交易は始まっていた）。しかし、この二日まえの一日からすでに異変と考えられるべき事態はあった。二隻のイギリス船の周囲に「千艘以上のカヌーと、恐らく、一万人以上の人々がカヌーや海の中や船の上におり、「……」その半分を断らなければならないほどの食料を運んできていた」のである。クツク自身も以下のように述べている。「私はこの地でこんなに多くの人々が一箇所に集まるのを見たことがない。その上、湾の浜を埋め尽くしたカヌーには人が乗っており、数百人の人々が魚の群れのように船の周りを泳いでいた」（ピーグルホールによるクツクの引用）。

クツクたちはこの一年前、すなわち一七七八年一月にもハワイ諸島のカウアイ島に来航していた。サーリンズは、このクツクの二度の来訪がともにマカヒキの期間であったことを重要視して、クツクの乗船であるレゾリユーション号にやってきたカウアイ島民たちが「自分たちを清めるためらしく甲板に上がる前に呪文を唱え」（サーリンズ）ていたことに言及し、この時点ですでにクツクがロノ神として認識されていたとみなしている。また、ロノの神像の表象がクツクたちの帆船のマスに似ていたこと、さらには、かれらの船がハワイ島を右回りに、つまりロノ神が税としての大地の恵みを徴収する回り方と同様に廻航していたことも、クツクとロノ神の同一化に大きく寄与したはずである。

いずれにしても、ロノ神は農耕儀礼の神にして、マカヒキの季節にやってくる来訪神であることはまちがいない。

## 二 ケアラケクア湾での儀式

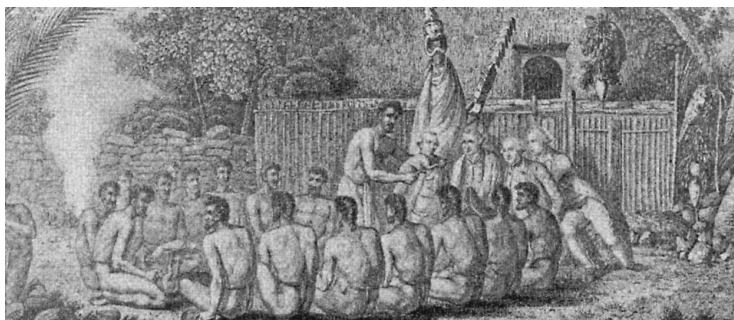


図7-3 ヒキアウ・ハイアウまえで、おそらくは儀式を受けているクック一行  
(後藤明『カメハメハ大王』)

そして、この神がポリネシアで広範に信仰されていたことは、それがニュージールランドのマオリ族のあいだでは「ロンゴ」、そのほかの地域では「ロオ」、「オノ」などの名で呼ばれていたことでわかる。

ところで、こうした住民たちの（おそらくは儀礼であるところの）盛大な歓迎のなかで、クックはコア（コアあるいはトウアア）という高位の神官と船上で出会う。コアはこのとき、自身の紹介とともに、クックにブタ数頭とたくさんの果実を贈ったが、さらに、ハワイでは神聖な色とされる赤い織物でかれをおおい、「長たらしいお祈り」（ビーグルホール）をしている。クックはすでに自分がなにかの儀式の対象になっていることに気づいていたが、それをはっきり自覚したのは、ケアラケクア湾上陸後に、この神官コアにヒキアウ・ハイアウ（ハイアウは宗教施設で、ヒキアウはその名称である）に連れていかれたときであったようだ。

この宗教上の構造物は次のようなつくりである。約二〇×四〇メートルの長方形に石を敷きつめられて、その周囲には人間の頭蓋骨が二〇個ほど装飾された手すりを設置されていた。敷地内には、二体の像がそばに立つ小屋二軒と、やぐらと塔がひとつずつ建てられている。このやぐらの正面には一二体の像が半円形状に立ちならび、その中央の祭壇には

おそなえをする台の形状をした祭壇があり、ここには腐ったブタ一頭と、その下にはさまざまな果物がそなえられていた。このやぐらと祭壇で、クックをロノ神に同化する儀礼がおこなわれたのである。

「コアはクックを祭壇の前に導き、腐った豚を取り、祈りのような声を発し、そして、豚をぶらさげて、クックの手を取り、危なっかしいやぐらを一緒に登った。一頭の豚と一枚の大きな赤い布「……」を運んできた。○人の男達が手摺りを廻って低い扉の所まで来た。ケリ・イケア「ハワイの長身の青年司祭」はその赤い布を受け取りコアに渡し、コアはその布でクックを包むように巻いた。豚はコアの所へ持ち上げられ、コアはケリ・イケアと一緒に嘆願のようなことを行ない、それから、その豚をぶらさげてクックと共に地面に降りてきた」

(ビーグルホール)

聖なる赤い布や祭壇のブタに強烈な宗教的意義が包含されているのは、明白であろう。このあと、クックはさらに、やぐらのまえの一連の像のなかでも中央に位置する、やはり聖なる布がかかっていた像に対し、ひざまづいて平伏させられたうえに、キスするように強要され、ついにはコアのいうとおりにしている。ケリ・イケアが焼いた豚やそのほかの食物をささげているあいだ、クックに対してなされた儀式に、サーリNZは注目している。司祭の助手たちが「エロノ」(エは冠詞にあたる)ということばをふくむ詠歌チャントがうたわれているなかで、クックは海軍士官の部下に腕を支えられて、ロノの神像と同じポーズ、すなわち両腕を横に伸ばしたままに固定されていたのである。これこそ、クックをロノ神と同定する決定的儀礼なのだ。しかも、コアはクックにココナッツの汁を塗りつけ、食物を食べさせる儀礼ハナイプーをおこなっているが、これは神に対してなされる儀礼である。

## 二 ケアラケクア湾での儀式

そして、もうひとつ、この儀式で見落としてはならないのは、クックがひざまづいてキスするように命令された特別な神像のことだ。この像こそ、じつはマカヒキ祭の儀礼構造、いわばハワイ住民の精神世界や世界観を知るための鍵であるところの、ロノとならばハワイの三大神のひとつクー（マオリ島ではツーマまたはツーマタウエンガ）であり、つまるところ、ヒキアウは、クー神を祀ったヘイアウなのだった。クーは山の神、海の神でもあるが、マカヒキの儀礼で重要な役割をはたすのは、戦いの神としての象徴である。

農耕神ロノと戦闘神クーというふたりの神による二重の支配構造のなかに、呪術的農耕儀礼としてのマカヒキの



図7-4 羽毛でつくられたロノの神像  
(後藤明『カメハメハ大王』)



図7-5 ロノと同じく羽毛でつくられたクーの神像  
(Hauser-Schäublin, Krüger, James Cook. *Gaben und Schätze aus der Südsee.*)

祭りは展開されていく。このふたりの神々の性質、クー神が戦いの神であるということと、とりわけロノ神が外来する農耕神であることが、マカヒキ祭を特徴づけており、そのことがまた、クックのような外国人が神と同定されるという、にわかには理解困難な事態が生じさせているといえるだろう。

### 三 〈死にゆく神〉としてのロノ神

訪れる農耕神ロノ ロノ神が来訪神であることは、ポリネシアに伝わる神話でも例証される。ハワイ諸島の神話によれば、ロノ神は天から虹をつたって地上に降りてきて、ハワイの女性と結婚したといわれる。フィジー諸島に属するラウ諸島の神話もこれに関連するものだ。フィジー諸島は、地理的にはメラネシアの一部とされるが、文化的にはポリネシア的要素が強く、ラウ諸島はとくに、トンガ諸島の王権との交流が古来よりあるがゆえ、とくにポリネシア文化の強い影響下にあるために、神話の関連性は注目し値する。ラウ諸島の神話では、首長たちの先祖は船の遭難者で、サメとの交友によって、ラウ諸島のヴィチ・レヴィ島へ到来した者であるという。そして、かれはこの土地の首長の娘と結婚したために、この家系の者は「ナ・ウギオ」（サメの意）と呼ばれている。

ハワイでも、島の地方をおさめる地方首長は「アリ・アイ・モク」（島を食う首長）、その下の地区首長は「アリ・アイ・アイ・アプアア」（地区を食う首長）と呼ばれており、また「陸に上がって行く鮫は私の首長だ／土地のものをすべてを食い尽くすことのできる／とても強い鮫は」という、首長をサメにたとえる詠歌も伝承されている。「首長は陸を旅するサメだ」というハワイのことわざは、これに由来する部分があるのだろう。つまり、ロノの外来神としての性質がサメで表象されており、それゆえに、この外来神につらなる首長の一族は、高い身分が保障されて



いることを示すものである。

農耕神ロノと戦士の神クーとの関連を示すものとして、ニュージーランドの原住民であるマオリ人の司祭の農耕儀礼が挙げられる。マオリ人司祭がロンゴ神（ハワイでのロノ神にあたる）の役を演じながら、サツマイモを埋めるといふ儀礼である。神のためにとっておかれた小山にある小さなサツマイモ畑で、〈孕めよ、孕めよ〉というこゝとばがふくまれた詠歌を詠唱しながら、その年の作物を植えるのだ。このばあいのロンゴ神は本来、妻を妊娠させるために、サツマイモをペニスの中に隠して、精霊の故郷からもってきたという伝承に発するといふ。そして、収穫時になると、儀式の続きとして、人間の祖先である戦士ツ（ハワイでのクーにあたる）に扮したべつの司祭が出現して、ロンゴ神と戦ったあとに、最初のサツマイモを掘り返して束ねたものをふたたび埋めなおすのである。同様の儀式として、ニューギニア東方のマーシャル諸島では、畑の生産が豊かになるように、呪法をおこなうのが氏族の首長の義務であった例を、J・G・フレイザーが『金枝篇』に記している。このばあい、畑の土の一部を掘り返し、その作物に割りあてられている呪文を唱えたといふ。

マオリ語で「小山」は〈恥丘〉の意味ももっており、「妻」は〈畑〉も意味していることから、この神話が、〈聖なる結婚〉という呪術的な農耕儀礼とまさしく同じ構図を形成しているのは、たいへん興味深い。〈聖なる結婚〉とは、フレイザーのいうところの、植物が男性あるいは女性要素の性的結合によって種を繁殖させるという思考にもとづいて、この繁殖を男女の祭司が「神と女神の演劇的結婚」（フレイザー）として演じることで豊作を祈願する農耕儀礼のことである。すなわち、ギリシア神話の天空神ウラヌスが大地の女神ガイアに恋して、雨を降りそそがせ、大地を孕ませた結果、穀物や果物を豊かに実らせたといふ神話と同様に、ロンゴ神とサツマイモと「小山」と「妻」をめぐる神話は、性交による受精の過程を農耕という具体的な比喻で表現しているといふことだ。

しかし、さらに興味深いのは、サツマイモの親にしてイモそのものでもある神ロンゴ（ハワイでもやはり、農耕神ロノはまた「サツマイモの神」であった）を殺すなり、眠らすなりして、人間がこの作物を利用できるようにしていることである。ここに、人間に打倒されて〈死にゆく神〉と、人間はその神によって大地の恵みをもたらされるという世界観、くわえて、ハワイの戦神クーが、じつは人間たちの首長の祖先であって、人間が神と同定されることの根源イメージがみいだされるだろう。

そのうえ、べつのハワイ神話で伝えられているマカヒキ祭の起源は、ハワイの住民にとって、クックの来航がどのような意味をもっていたかを教えてくれる。神話によると、ロノはその美しすぎる妻にあらぬ疑いをいだき、妻の不義を誤認した結果、殺害してしまう。この妻を祀るために、ロノが始めたのがマカヒキの祭りだという。ロノは大きなカヌーを建造し、ロノの先祖の国カヒキへ旅立つが、祭りの時期に、このカヌーいっぱい作物や家畜とともに帰還すると、人びとに約束していた。それゆえ、マカヒキの祭りは、たくさんの収穫をもって帰還するロノを迎えるための儀式だといわれているのである。

ちょうど一七七八年のマカヒキの時期にクックが来航したことが、まさしく「ロノの帰還」として人びとのあいだで容易に受容されたことは、想像に難くない。ただでさえ、未知の風俗をしたヨーロッパ人たちの遭遇はきわめてセンセーショナルなものであったろうし、しかも、ロノのシンボルカラーであるところの白色の服を、クックは身につけていたともいわれているのであるから。クック以前のポリネシア地域来航者として有名なフィリップ・カートレット（一七三三―一七九六）、サミュエル・ウォリス（一七二八―一七九五）と同じく、クックもポリネシア住民たちの「盜癖」を非難して記しているが、その理由のひとつとして、住民がヨーロッパ人のもちものを、ロノがその神の故郷からもち帰った収穫とみなしていたと考察すれば、いくらか納得がいくのではないだろうか。住民たち



にとつては、自分たちのもとへロノ神が約束どおりに船でもたらしてくれたものだから、かれらがもらうのは当然なのだ。

そもそも、ポリネシア地域の住民たちの思考が、中沢新一氏のことばでいえば、〈対称性〉のものであったことも起因するだろうか。〈対称性〉の思考とは、神話での自然や動物（霊）が人間とまったく同価値の登場人物としてあらわれて結婚したりするが、これを自然なあたりまえのこととして考えるような思考のことである。中沢氏はたとえば、この〈対称性〉という語を説明するために、始原の人間がいわゆる「言語」ではなく、「詩」と「音楽」でたがいが語りあっていたという、ジャン＝ジャック・ルソーの『言語起源論』を引用して説明する。すなわち、神話に登場する人間と動物（霊）がたがいに等価な存在で、自然（と動物）の世界と、人間の世界がたがいに対応しながら、つりあいを保っているような思考を、ハワイの人びとがもっていたということだ。かれらはハワイの神話世界と現実世界を同時に生きていたのである。

一九世紀中盤に勃発した第一次マオリ戦争のさいのニュージールランド政府高官の証言が残っている。「驚いたことに、これら首長は私と話すときも手紙の中でも、考えや意図を説明するために頻繁に古来の詩やことわざを引用し、古い神話に由来する喩えを用いるのである。[…‥]そのような状況下でただひとつのことが可能であった。それは伝統的な詩や伝説を集め、司祭を説得して彼らの神話を教えてもらい、彼らのことわざを学ぶことである」（サーリンズによる引用）。

ハワイの首長と司祭、そして住民たちは、ほかならぬその地の神話的世界観、すなわち祭祀と儀礼にもとづいて生きていた。そうしたかれらの特別な祭祀期間であるマカヒキの季節に、ロノ神が島の巡回を始める出発点となる祭祀空間ケアラケケア湾上に出現したクツクは、この瞬間、まさしく神話の登場人物ロノ神であったにちがいない。

## 四 カーリイの儀式（神と王の模擬戦）

王が神を倒す儀式 司祭コアから儀礼を受けたクックであるが、かれをロノ神として承認する儀礼をほどこした特別な人物がいた。クック来航当時の王であったカラニオプウ王である。このころ、ハワイ諸島には四つの王国が存在していたが、かれはハワイ島を中心にした王国の王であり、かれの死後、ハワイ諸島の統一王権を樹立するのがその甥で、のちに大王と呼ばれるカメハメハ一世（一七五八？—一八一九）である。日本ではとくに、NHKの「みんなの歌」で人気を博した歌、「南の島のハメハメハ大王」（伊藤アキラ作詞、森田公一作曲、一九七三年）のモデルとして知られているだろうか。ハワイは当時、南太平洋諸島最大の首長制社会を形成しており、王族はその系譜がハワイの創世神話『クリムボ』などの神話に登場する神々へ集束していくように、神々の系譜に列していた。こうした系列の近しさと年齢の高さによって、首長の位階は決定されるのが一般的で、つまり、王とは最高位首長なのである。

そして、ハワイをふくめた南太平洋諸島の王が呪術的儀礼をおこなうことは、フレイザーも興味深く言及しており、神が人間に憑依する事例として、南太平洋諸島の儀礼を記している。ハワイ諸島では、神をよそおう王は、小枝で編んだ隠れ家から神託を述べたというほか、南太平洋諸島ではさらに、神は祭司の身体に入ったという。同じくマンガイア島では、神が乗り移る祭司は「神の箱」、「神」と呼ばれたり、フィジー島の各部族には、神霊を受け入れる特定の家族がいたりしたことなどを例示している。すなわち、ポリネシア地域では、神が王に憑依する呪術的儀礼が広くおこなわれていたのであるが、ハワイ諸島のマカヒキ祭でも、この儀礼はやはり大きな役割をになっ

ていた。

ビーグルホールのクック伝記によれば、一七七九年一月二五日、カラニオプウ王はその妻と息子ふたりと首長たちをとめない、レヅリューション号にやってきて、クックと名前を交換し、クックからの贈り物を受領している。その翌日にふたたび、このハワイ王は三艘の大型のカヌーでやってくるのだが、この伝記作者が記す「水上行進」がまたもや、クックとロノを同定する儀礼であるのは明らかだ。「最初のカヌーには、カレイ・オブ・ウ「カラニオプウ」と主だった家来の一団が乗っており、カレイ・オブ・ウは王家の色であり神聖な色である黄色と赤色の鳥の羽根で作った豪華なマントと帽子を着けて立っていた「……」。二番目のカヌーには年老いたコアをリーダーとした神官「司祭」達が詠唱していたが、コアは王と共に四体の神像をお守りして帰ってきていた。その神像は怒りで顔を歪めており、歯は犬の歯で、目は真珠貝でできていた。三番目のカヌーには沢山の豚や椰子や野菜が積んであった」（ビーグルホール）。

カラニオプウ王が「この大洋では最も輝かしい衣装」を着用し、コアが神像四体とともに出現していることは、ほかならぬ儀礼成立の条件なのだ。「ポリネシアでは、傑出した酋長「首長」は王ー祭司ではなくて、彼の職務と威厳が当然のこととして彼に祭司たちに対する権限を与えていた」と、J・P・ルーが指摘しているように、司祭コアの権限はカラニオプウ王に従属するものであって、王あつての司祭であることは、コアが乗船するカヌーが第二番目に位置していたことが象徴している。そうした王と司祭の関係も内包しながら、カラニオプウがおこなった儀礼は、つぎのように描かれている。

「カレイ・オブ・ウはクックの肩に自分の着ているマントを掛け、頭に帽子を載せ、手には王家の印の一部で

ある羽根のカヒリ、または、軍配を持たせ、彼の足元には半ダースの羽根のマントを置いた。正に王者に相應しい贈り物であった。それから、神官の長である神々しいコアが来て、クックを宗教的な布で包み、宗教的な豚の供物をしたが、この間、ケリ・イケアとその従者たちは伝統的な朗唱を行なっていた。これらが行われている間、見える限りの平民は平伏しており、湾には一艘のカヌーも動いていなかった」

クックとカラニオプウ王は、すでにこの前日に名前と贈り物の交換を終えていたが、その翌日の様子を記したこの引用では、王は自身のシンボリックなマント、帽子、軍配をクックにもたせ、高位司祭コアはここでもまた赤い布を着せるという儀礼の過程をわかりやすく知らせている。すなわち、「彼らの偶像はことごとく、クック船長と同様赤い布を着せられていた」という証言からも、クックはこれと同種の偶像とされたのであって、名前とシンボルの交換は、マカヒキ祭のあいだ、王からクックへ支配権の移譲を示すものなのである。こうして、クックは司祭と王からロノ神と完全に同化され、しかも支配権まで移譲されたのだったが、このことがマカヒキ祭のクライマックスの序章、それも倒される神の儀式、〈カーリイ〉の始まりであることは、もちろんクックは知るすべもなかったのである。

神と王が戦う儀式の名であるカーリイが「王をうち負かす」かつ「王としてふるまう、王になる」という意味であることが、その儀式の本質をすでに物語っているだろう。マカヒキの祭りは、「神々の通り道」という意味の「ケアラケクア」湾の浜辺にロノの神像が立てられるとともに始まり、二三日をかけて右回りに島を巡回していくのだが、その最後は、王とロノ神が対決する模擬戦を演じる儀式カーリイで締めくくられるのだ。大勢の武装した戦士たちに守られたロノ神像が、儀式の最初に立てられた宗教施設ヒキアウ前方に位置する海岸にふたたび立てられる。



図7-6 ビーグルホールが「軍配」と記述するところの、司祭が儀式に用いた「ハ工追い」  
(Hauser-Schäublin, Krüger, James Cook. *Gaben und Schätze aus der Südsee.*)

そこへ、カヌーに乗った王がおなじく戦士をひきつれて、海からやってくる。王のまえに居るのは、ヤリを払う技に優れた戦士である。ロノ神を守る戦士側から、第一のヤリが飛んでくるが、それをなぎ払うのはこの戦士なのだ。そして、第二のヤリは、払われることなく、王の身体にヒットする。これを合図に、王の戦士たちは上陸し、ロノ神の護衛たちと、模擬戦に突入していくという流れになっている。

このカーリーの儀式で、第二のヤリが王の身体に命中することは、〈神に殺害された王の死〉を象徴している。そして、この王の死が〈神への犠牲〉として捧げられたことを意味するのが、カーリーの特徴なのである。このことを意味するのが、カーリーの特徴なのである。この〈死〉のあとで、王はヒキアウのなかに入り、そこで貢物をロノ神に捧げる。その一方で、ロノの神像は解体されて、隠されてしまうことで役割を終えるのである。

先述のマオリ人の神話にある農耕神ロンゴと戦神ツアの戦いが、この儀式の起源となっており、ハワイにおいて、農耕神ロノと戦うのは、戦いの神ターの血をひく最高位首長の王という図式が成立している。

サーリンズの指摘では、この儀式の構造はフィジー島での即位式に似ているとされているが、ここでわれわれにとつて複雑なのは、この〈王の死〉がじつは、〈王の再即位〉をも意味しているという点である。外来のロノ神

に対して戦いを挑む王がカヌーで参上することは、王もまた外来の存在であることを演じており、ふたりの外来者による支配権の移譲が、〈死〉と〈再即位〉とともに同時におこなわれていること。この儀式的構造の複雑さは、この神と王によっていちどきになされる、生と死、即位と再即位、支配権の移譲と篡奪、これらがからみあつた二重構造をもっていることにあるだろう。その神は、ブタや農作物などのさまざまな供物を捧げられながらも、つぎの瞬間には即、自分自身が人びとに捧げられる供物となってしまう神である。しかも、この儀式は、〈対称性〉の思考の世界、つまり現実世界と神話世界が混合する島世界でおこなわれているのだ。クックをはじめとするヨーロッパ人が認識できないのはむしろのこと、おそらくハワイ島民たちも、そのふたつの世界があいまいに混合した世界をそのまま感受していたのだろう。

だが、きわめて興味深いのは、ハワイ諸島の住民たちにとって、このカーリーの儀礼がやはり農耕神ロノをめぐる農耕儀礼としては最高度に重視されていたと考えられる点である。このことは現実世界の秩序、つまり暦との関係で理解される。すなわち、農耕神ロノを祀るマカヒキ祭の中心儀式カーリーは、一二月二一日、ほかならぬ冬至の日におこなわれていたことだ（サーリンズの計算による）。冬至は、世界各地の農耕儀礼においても、冬と春の季節の節目の日であり、自然の死と再生の日としてみなされているのだから。それゆえ、カーリーを頂点とするマカヒキ祭もまた、農耕神および冬至という農耕儀礼の決定的要素によって特徴づけられているのである。

## 五 タブーと人身供儀

禁じられた風習 一八世紀後半の航海者やこれに同行した学者がポリネシアの世界について記述しているのを読む

と通常、奇妙な習慣（タブー）に対する示唆（当時のヨーロッパ人は（タブー）がなんたるかを理解していなかった）と、人身供犠への非難を目にするだろう。「楽園」とみなしていたタヒチで、クックたちが人身供犠の儀式を確認したことは、とくにその失望ゆえに、ヨーロッパで大きく喧伝された。このマカヒキ祭でも、それはいたるところに顕著にみられる。

一七六七年に、サミュエル・ウォリス船長がタヒチに來航したさいに、そのドルフィン号の甲板に、バナナの房が投げ入れられており、一七七二年にクックがタヒチを訪れたときも、同行したフォルスターが同様の行為を目撃し、それを「友好の印」と記している。ところが、このバナナは、人身供犠の儀礼に用いられるもので、犠牲者の不足数をおぎなうための「背丈のバナナ（タアツ・オ・メイア・ロア）」であったのだ。

そもそも、マカヒキ祭のクライマックス、外来神との戦いカーリイにおいて、王自身がすでに人身供犠で捧げられている。これは儀礼のなかでの「演劇的殺害」のみを意味するのではない。「高位の首長が殺されないことは稀だ」というラウ諸島の高位の人物のことは、儀礼としての首長殺害がじつさい頻繁に起こっていたことを証明している。

また、ラウ諸島の首長が王となる即位式では、毒がもられることになっていた。首長を神聖なものへと転化させる、カヴァの木（ハワイ語では「アワ」と呼ぶコシヨウ科の灌木 *Piper methysticum*）からつくられる飲料に、この毒はふくまれており、カヴァこそは外来の王へ捧げられる聖なる供物であった。この儀式的構造は、カーリイでの王の儀礼上の死とおなじく、服毒による象徴的な（死）を意味するものだ。ラウ諸島とトンガ諸島の神話によれば、カヴァはこの地の民の子どもや若い首長の屍体から生じたもの、あるいはその子どもは首長に食物として捧げられたものであったともいう。ケアラケケア湾のヘイアウで、クックが高位司祭コアによって神に食物を食べさせ





図7-7 ハート型の葉が特徴的なカヴァは、根を乾燥させて粉末状にしたものを、水に溶かして飲むと、酩酊状態になるといわれる(『太平洋諸島百科事典』)

をもつ。たとえば、〈タブー〉が最も強力な首長たちは、「神」、「火」、「熱」と呼ばれ、直接にかれらを見ると、かならず目が傷つくと言われたり、〈タブー〉を侵した平民が人身供儀の犠牲者と決定したばあい、最初にその者の目が王の刑吏によってくり抜かれるのである。

くわえて、一七七九年二月一日付のヨーロッパ人が初めてハワイでキリスト教にもとづいておこなったとされる葬礼にも、ハワイの人身供儀の儀礼が関与していた。この日の朝に、高血圧で倒れた老水兵ウィリアム・ワットマ

せる儀礼ハナイブーをうけたさいに、おそらくはこのカヴァの飲料に類するものを飲まされていたと思われる。

この首長たちが聖なるものの力をおびているがゆえに、住民たちは容易に触れてはならぬ〈タブー〉という存在でもあると認識しているわけである。〈タブー〉とはそもそも、「ポリネシア語のタブまたはタブから派生した用語で、禁忌あるいは禁止を意味し、さらに聖なるものや呪われたものを区別する儀礼的用語」(『ブリタニカ国際大百科事典』)でもある。ポリネシアでは、この〈タブー〉を生じさせる力を、超自然的な能力にして一種の政治権力を約束する力、〈マナ〉と呼んでいた。

ハワイでは、その〈マナ〉の効果は、人間の視線によつて媒介されるものであるために、目そのものが特別な役割



ンが死んだのだが、首長たちの強い要請によって、その遺体はヒキアウに埋葬された。イギリス人たちの葬礼が終わったあと、三日三晩、高位司祭コアを中心とする司祭たちは、「墓穴に死んだ子豚や椰子やバナナなどを供え、〔……〕祈りの儀式」（ビーグルホール）をおこなった。一説によると、この日は、供犠儀礼で王の代行者であるところの生き神の役目を果たす者（カホアライ）が、新年最初の人身供犠の犠牲者の眼球を飲みこむ儀礼の日であったされる。

このように、〈タブー〉と人身供犠によって支配されている儀礼でもあるマカヒキ祭の時期、外来神とその土地の王が戦い合う儀礼世界のなかに、クックはロノ神として存在していたのである。

## 六 農耕儀礼で捧げられたクック

偶然の儀礼殺人 クックが殺害されるにいたった原因のひとつは、かれのロノ神との同化にあったのだが、しかしそれだけで殺害されたのではない。クックがケアラケクア湾を出航したのは、一七七九年二月四日未明のことだったが、その後、嵐にみまわれ、レゾリューション号のマストが倒れたために、二月一日にふたたびケアラケクア湾に戻ってきた。クックたちの船が戻ってさえこなければ、儀礼の暦では、カラニオプウ王がハワイ最大の神クーに供物を捧げて、通常のロノ神の信仰が始まるだけであったのに。

クックの早すぎる帰還は、ハワイでの社会秩序をすぐに破壊し、混沌をもたらしたようであった。このときのクック乗航には、前回のときにくらべると、住民たちの集まりはかなり少なかったという記録が残っている。王が勝利している期間にもかかわらず、ふたたび神があらわれたという、神話と自然の暦に合致しない神の再訪が、ハワ

イ社会を根底から転覆させようとしていたのだ。

今回の到着以来、「日毎に大胆不敵な略奪行為が増えてきている」（ビーグルホールによるデイスカヴァリー号船長クラークの引用）なかで、ついにデイスカヴァリー号唯一の大型ボートが盗まれたことが、二月一四日の紛争の直接的原因となった。交渉に出かけたカアワロアの浜で、クックはマスケット銃で武装した部下九人とともに、同じくヤリと石で武装した住民たちに包囲された。部下が首長のひとり射殺したのが、殺し合いの始まりであった。クックは「後から棍棒で殴られ、よろけるところを首か肩を鉄の短剣で刺された。『……』大歓声があがり、彼を組み伏せるために人々が殺到し、短剣や棍棒の嵐で終わった」（ビーグルホール）。クックと四人の海兵たちの死体を引き取ることもできずに、生き残った者たちは、二隻のイギリス船へ逃げ帰ったのである（海の王者クックがじつは泳げなかったという事実も、その死の原因のひとつであるのはまちがいないのだが）。

サーリンズはクック殺害の犯人を、王の守備戦士で社会的地位も高く、王とも姻戚関係にあったヌハ（もしくはカヌハ）という、カアワロアでは有名な地主一族出身の精悍な若者であると推理している。王族に列し、特権をもつ小首長にクックが殺されたとすれば、このクックの死は儀式殺人ということになるだろう。マカヒキ祭の儀式カーリイでおこなわれたのと同様に、王による神の儀礼的殺害を現実遂行したのだから。王が外来神に支配権を委譲するが、王は死と同時に再即位し、その神を倒すという、ハワイ諸島の首長にとっては自明の帰結を、マカヒキの期間が過ぎていくにもかかわらず、再臨した神に対して実践しただけなのだから。

儀式としてのクックの死はまた、既述の「高位の首長が殺されないことは稀だ」というフィジーのラウ諸島出身の高位の人物の証言とともに、王権についてのフレイザーのことを思い出させてくれる。「初期には、王の義務はその特権よりもはるかに大きいものであった。『……』彼が果たすことを期待される聖なる役割は、共同体の安

泰やその存立にさえ不可欠なものとされ、いかなる犠牲を払っても誰かがそれを行わなければならない」。事実、ヌハの一撃のあと、ハワイの首長たちはクックに殺到し、クック殺害に参加しようとした記録が残っている。しかも、ビーグルホルの伝記では、クックの身体は殺害後、「島のいろいろな場所の酋長「首長」達に分けられてしまい、集めることは不可能」であつたのだが、それでも回収されたクックの遺体は「頭皮、腿や足や腕の長い骨のすべて、下顎のない頭蓋骨」と「右手」であつた。クックの身体は切断され、酋長たちに人身供儀の神の供物として儀式的に食されたのである。クック殺害が儀式だと認識していたのは、司祭たちも同じで、かれらはクックの死後に、かれがいつ帰還するかを尋ねていたのだつた。

ところで、クックがカーリーの儀式のあとに、ヘイアウの堀と、そこに立っていた木製神像数体を、神官コアと交渉して買い取り、出航準備用の薪にしたことを、ビーグルホルは瀆神的と批判しているが、サーリンズによると、この行為は非難にはあたらぬ。マカヒキ祭のたびごとに、ヘイアウと神像が新造されるために、儀式が終われば、住民たちも薪にしていたからである。

## 七 ふたつの世界の神クック

外来神のもたらしたもののクック殺害をハワイ住民たちの未開性と残虐性に帰する発想が、ジョン・ウエバーの《クック船長の死》という絵画の系譜に始まることを、すでに本章冒頭で述べた。たとえば、この系譜に連なるジョン・クレヴリー、ジョージ・カーターのものは、後ろから短剣で刺そうとする酋長らしき人物が描かれており、まさしくウエバーの凶版をもとにしている。ゴードン・ブラウンの絵は、さらにもっと酋長の凶暴さをデフォルメした

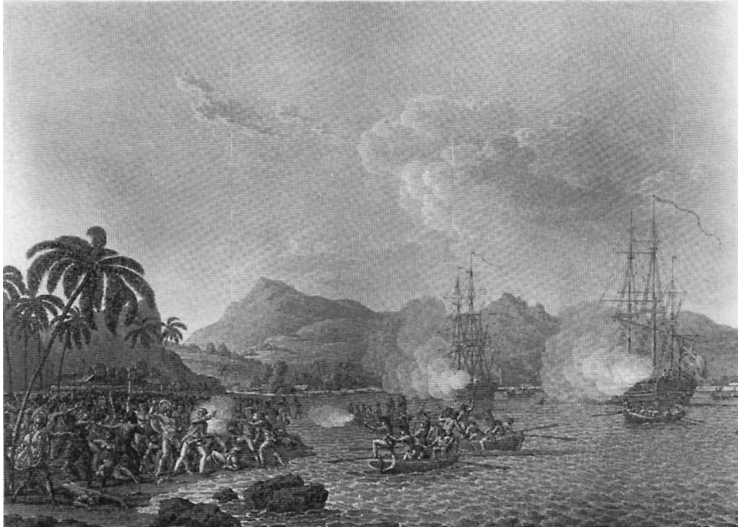


図7-8 ジョン・クレヴリー 《サンドウィッチ諸島のひとつ、オアフ島の風景》



図7-9 ジョージ・カーター 《クック船長の死》

七 ふたつの世界の神クック



図7-11 ヨハン・ランベルク『地理学の新体系』(1787)の口絵



図7-10 ゴードン・ブラウン  
《クック船長の死》

ものだ。ヨハン・ランベルクとフィリップ・ジエームズ・ド・ラウザーバークはそのうえ、クックを天使やギリシアの神々に言祝がれる人物や、女神にいざなわれて昇天していく人物として描写している(図7-8から12までの図版はすべてSmith, *Imaging the Pacific*: ほか)。

これらのクック像には、未開人による犠牲者、キリスト教の殉教者、南太平洋への十字軍遂行者としてのイメージが投影されているが、かれの衣装がたいてい白く描かれていることによって、そうしたイメージがいつそう際立っているように思われる。

これにくわえて、バーナード・スミスは、イギリスの経済学者アダム・スミス(一七二二—一七九〇)と同時代人としてのクックに着目している。スミスはクックよりも五年前に生まれ、クックの死から一二年後に死





図7-12 フィリップ・ジェームズ・ド・ラウザーバーク  
《ジェームズ・クック船長の神格化》

んでいる。スミスの古典経済学の書『国富論』が出版されたのは、ちょうどクックが第三次世界航海に出航するために、荷物を積み込んでいたころの一七七六年三月であったが、この出版社はロンドンのストラハン・アンド・カテル、のちにクックの公式航海誌も世に出すことになる出版社である。『国富論』は自由主義経済政策を分析した大著であるが、この著作が分析しているヨーロッパの資本主義経済の理念をポリネシアのハワイへともたらず嚆矢としての役割をはたしたのが、スミスの同時代人クックだといえよう。

ヨーロッパ人の来航以前、ハワイ諸島そのものは、安定した社会であった。ほかのポリネシア地域との交流は途絶えていたが、タロ芋を中心とした農作物と海でとれる魚で、食物は自給自足でまかなわれていた。ハワイ社会は首長と司祭と一般住民から成立しており、四つの王国

に分かれていたが、ハワイ諸島を統一できるような強力な権力が生まれることもなかった。

しかし、カラニオプウ王の息子、長男キワラオとその弟ケオアウと、王の甥カメハメハ一世との抗争を契機に、ハワイ諸島は激変していく。クックの死後も、ヨーロッパ人のハワイ来航は絶えることなく、近代的兵器である銃や大砲がもちこまれる。そして、一七九〇年にイギリス人ふたりを軍事顧問としたカメハメハが、一八〇九年にハワイ全諸島統一権力を誕生させるのである。ハワイ統一をはたしたカメハメハ大王はその後、白檀びやくたん（サンダルウッド）貿易をおこない、政府による独占と関税で巨万の富を獲得するにいたる。

とはいえ、カメハメハのハワイ征服以前、ハワイ社会の変化はすでに起こり始めていた。三人のハワイ人首長がその後継者となる息子たちを「キング・ジョージ」と名づけており、西欧人の名をつけるのは、貴族層の流行となっていた。そして、ハワイ征服後のカメハメハは、自身が「キング・ジョージのような」生活状態にあるかと、訪れる西洋人につねに尋ねたという。

一方、この統一抗争のあいだには、ハワイでのキリスト教布教は始まっていた。一七九〇年代にはロンドン伝道協会が、一八一〇年代末にはアメリカ海外伝道評議会がハワイに上陸し、キリスト教の伝道を本格的に開始したのである。

一八一九年五月八日にカメハメハ大王が死ぬと、大王の妻のひとりカアアフマヌは、父の跡をついだ息子カメハメハ二世（リホリホ）の摂政をしていたが、この年の一月にタブー廃止を断行する。ポリネシアの風習として有名であったところの、「男女は食事のさいに同席してはならないこと」、ならびに「女性はバナナやニワトリとブタを食してはならない」というタブーを、外国人の客も招待した王宮での饗宴で、それも住民たちの眼前で破ってみせたのである。カメハメハ二世が倒れて死ぬことは、ついぞなかった。このときの状況を、最初の宣教師サースト

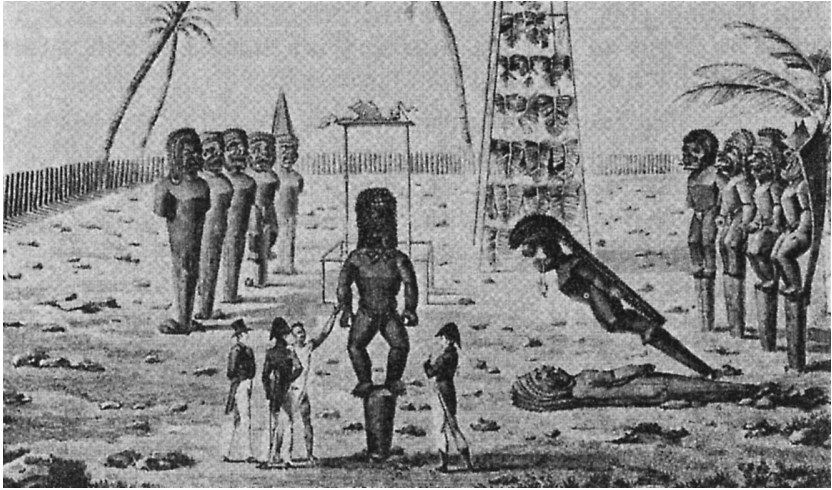


図7-13 ヨーロッパ人に引き倒されていく偶像たち（後藤明『カメハメハ大王』）

ン師の夫人は以下のごとく記述している。「混乱を極めた食事が終ると、王は命令を発した。すべての偶像を破壊すべし、神殿は破壊すべし、司祭の権力は没収すべしと」（後藤氏による引用）。これこそ、ハワイ諸島が欧米の資本主義経済のシステムとキリスト教世界観とに完全に組み込まれてしまった瞬間であつたらう。

たしかに、数年間におよぶ世界航海を三度なしたとげたジェームズ・クックは、一八世紀のヨーロッパでは神に等しい存在だった。一八世紀後半の地理学および文化人類学の多大なる発展に貢献し、南太平洋諸島との交易の基礎も確立した。そして、ついには「未開人」の残虐行為によって、早すぎる死を迎えてしまう。この「殉教」とも呼べる死によって、なおさら人びとにあげられるような存在へと、クックは登りつめていく。その一方で、ハワイ諸島の人びとにとっては、豊かな自然の恵みをもたらす豊穡の農耕神ロノそのものである。マカヒキ祭の儀式過程と神話世界で弑逆されるべき運命の外来神でもあった。しかし、クックが外来神としてハワイ諸島にもたらしたものは、農作物の実りなどではなく、い



ずれハワイの社会と慣習を転覆させることになった欧米の資本主義経済とキリスト教だったのである。

### 参考文献

- 池澤夏樹 『ハワイイ紀行「完全版」』 新潮文庫 一九九六年  
ジェームズ・クック 『太平洋探検』 1-16 増田義郎訳 岩波文庫 二〇〇四—〇五年  
後藤明 『カメハメハ大王 ハワイと神話と歴史』 勉誠出版 二〇〇八年  
M・サーリンズ 『歴史の島々』 山本真鳥訳 法政大学出版社 一九九三年  
太平洋学会(編) 『太平洋諸島百科事典』 原書房 一九八九年  
中沢新一 『熊から王へ』 講談社選書メチエ 二〇〇二年  
J・C・ビーグルホール 『キャプテン ジェイムズ・クックの生涯』 佐藤皓三訳 成山堂書店 一九九八年  
ゲオルク・フォルスター 『ゲオルク・フォルスター コレクション』 森 貴史／船越克己／大久保進訳 関西大学出版部 二〇〇八年  
ブライアン・ブレイク、ジェイムズ・マックニーシユ、デイビッド・シモンズ 『南太平洋の美術』 阿達周策、神津朝夫訳 泰流社 一九八五年  
J・G・フレイザー 『金枝篇 呪術と宗教の研究』 第一—二卷 神成利男訳 石塚正英監修 国書刊行会 二〇〇四年  
J・P・ルー 『王 神話と象徴』 浜崎設夫訳 法政大学出版社 二〇〇九年  
矢口祐人 『ハワイの歴史と文化 悲劇と誇りのモザイクの中で』 中公新書 二〇〇二年  
山中速人 『イメージの〈楽園〉 観光ハワイの歴史』 ちくまライブラリー 一九九二年  
Georg Forster: *Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe*, Bd. 5, Berlin 1985.  
Johann Reinhold Forster: *Beobachtungen während der Cookschen Weltumsegelung 1772-1775. Gedanken eines deutschen*

*Teilnehmers*. Unveränderter Neudruck der 1783 [Berlin: Haude und Spener] erschienenen »Bemerkungen über Gegenstände der physischen Erdbeschreibung, Naturgeschichte und sittlichen Philosophie auf seiner Reise um die Welt gesammelt«, Stuttgart 1981. 254

Brigitta Hauser-Schäublin, Gundolf Krüger (Hg.): *James Cook. Gaben und Schätze aus der Südsee*. München, New York 1998.

Geoff Quilley, John Bonehill (Ed.): *William Hodges 1744–1797. The Art of Exploration*. New Haven, London 2004.

Bernard Smith: *Imaging the Pacific. In the Wake of the Cook Voyages*. New Haven, London 1992.